

天使の都の街角で

山田美和

白昼のバンコクで物乞いが警察に連行されていく様を目撃した。買い物客で賑わうデパートへ繋がる陸橋のたもとで乳飲み子を抱えて座っている物乞い女の前に、ぴっちりした制服に身を包んだ警察官が立ちただかっている。そこでよく見かける子連れの物乞い女。しかし警察官が取り締まるのを見るのは初めてだ。まくしたてる警察官に彼女は何も言い返すことができない。タイ人ではない。おそらくカンボジア人だろう。救いを求めるまなざしを周囲に泳がせる。通りを行き交うタイ人は一顧だにしない。ひとりの西洋人が「Speak English?」と声をかけたが、物乞い女の反応はなく、西洋人は立ち去っていった。私も物乞い女と目が合ったが、どうすることもできず、陸橋の上から成り行きを眺めるだけだった。物乞い女は通りの角の植込みの縁に座られ、警察官から質問されているようだが彼女の唇は動かない。彼女は持っていた手提げから紙幣を取り出した。警察官の白手袋の手がそれを制した。やがてトラック型のパトカーがやってきて、物乞い女は乳飲み子と共に屋根のない荷台に乗せられた。熱い日射しを遮るものも顔を覆い隠すものもなく、排気ガスが蔓延する目抜き通りをのろのろと運ばれていった。

物乞いが連行されるのを見たとき興奮して話す私に、ある友人は言った。「捕まった物乞いはおそらくスケープゴートでしょう。警察も検挙数のノルマがあるし、ちょうど逮捕キャンペーンにあたったんでしょうね。可哀そうなのは何も知らないその物乞いで、それを裏で操る人間は痛くも痒くもありませんよ。」——バンコクの繁華街や観光地には多くの物乞いを見かける。なかでも組織犯罪のひとつとして、カンボジアから母子を連れて来てタイで物乞いをさせ、その上を収奪するギャングが横行しているという。通りで座り込む物乞いの背後にはそれを監視する輩がいて、さらに彼らを仕切る上部組織があるという。数カ月後には、「カンボジア人の物乞い三二人、彼らを監視するカンボジア人四人を逮捕」の新聞記事を見つけた。捕まった監視係のカンボジア人によれば、三カ月前に物乞いをさせるためにカンボジア人母子らを調達してタイに来て、彼女らの監視代として一日四〇〇バーツを得ていた。彼らを操る本当の経営者はタイ人だという。

タイ政府は、タイ人でない物乞いや闇組織による物乞いを排除する意図で、障害者や高齢者など一定の条件を満たした者だけが登録することによって物乞いできるという、物乞い管理法なるものを起案した。これに対しては学識者や人権NGOが猛反対し、法案の見直しがなされている。登録制にしたとしても、裏でギャングやブローカーが暗躍することには変わりないと言われている。そのような犯罪に対して、タイにはすでに反人身取引法がある。同法によれば、搾取の目的で金銭の授受や詐欺や強制などの手段を使って、他人を売買したり送り出したり受け取ったり留め置いたりすることは人身取引罪になる。搾取の定義には「物乞いをさせること」も明示されている。同法に照らせば、タイの繁華街で物乞いをしている人たちは、特にタイ人でない物乞い、なかでも子どもは人身取引の被害者である可能性が高い。しかし、タイ人でない物乞いを反人身取引法上の被害者として認定し保護するよりも、入管法による不法入国・不法滞在者として逮捕し処罰するほうが手取り早い。もしくは完全に黙殺である。連行劇を目撃した数日後には、同じ場所で別のカンボジア人と思われる母子が物乞いをしていた。その陸橋の反対側のためには、ぴちぴちの制服を着た警官が、屋台の椅子にとっかかりと座りクイティアオ（タイの麺食）をすすっていた。

(やまだ みわ／在バンコク海外派遣員)